

女子大学生の内的作業モデルと宗教意識 ・ ストレスコーピング・抑うつに関連

宮本邦雄

問題と目的

乳幼児が養育者に対して形成する情愛の絆の発達・機能・個人差を取り上げたダイナミック・システムとしての Bowlby(1969 / 1982)の愛着理論は、Hazan & Shaver(1987)による成人愛着への適用によって、生涯発達における対人関係以外の領域に広がってきた。愛着と宗教意識・宗教行動の関連について、Kirkpatrick(1994)は、多くのキリスト教徒は神と私的な関係を持っていると認識し、それが信仰心の核となっており、信者の経験する神との関係は愛着関係の特徴を備えているという。

まず第1に、宗教的信念は神と近接しているという認知を強めるための様々な方法を提供する。一神論的宗教の重要な教義は、神が遍在的であるという点であり、信者の神に対する近接維持行動の最も重要なものは祈りである(近接の保持)。第2に、信仰は、信者がストレスを受けた際に、心理的慰撫やサポート、回復力の源泉を与えるという役割を果たす(安全の港、Hood, Spilka, Hunsberger, & Gorsuch, 1996)。第3に、宗教的信念は生活に対する自信と自己効力感をもたらし、仕事や対人関係でのチャレンジを活性化するという安全基地としての機能を想定している。以上の知見を考慮すると、宗教的信念や宗教行動と愛着および愛着行動が驚くほど類似していることが分かる(Kirkpatrick, 1999)。

Bowlbyの愛着モデルによると、愛着パターンの連続性と世代間伝達は内的作業モデル(Internal Working Models: IWM)の概念によって説明可能である。愛着対象との相互作用の中で繰り返された経験の結果として、子どもは養育者への接近可能性と反応性に関する信念と予期を発達させ、それが将来の対人相互作用

用における行動的、情動的、認知的反応をガイドする個別的なモデルとして機能するようになる。これらのモデルは、自分がどの程度愛され、世話を受け、保護されるに足る存在なのかという信念(自己モデル)とも結びつく。

Kirkpatrick(1999)は、愛着と宗教の関係について、まず、宗教的信念と予期の個人差は愛着スタイルの個人差と対応関係にあるだろうとする対応仮説(correspondence hypothesis)を提唱している。すなわち、自己や愛着対象とのポジティブな安定した一般的モデルをもつ人は、神に対しても同様の立場を取るであろう。親密な関係に対して回避志向の人は、宗教の面についても無神論や不可知論の立場を取り、神を離れており接近不能な存在とする傾向があるだろう。最後に、愛着関係において不安定なアンビバレント傾向の人は、神に対して情動的で激しくすがりつくような関係を持つだろう(Kirkpatrick & Shaver, 1992)。

一方、人は、先行経験や状況判断に基づいて、一次的な愛着対象への接近と安心を達成する努力がうまくいかないであろうと予測することがある。そうした場合、別のより適切な愛着対象を求める行動が開始され、その結果、代理の愛着対象として神が選択される場合もある。この場合は、報われない現実の愛着対象の代替物として神が位置づけられることになり、Kirkpatrick(1999)は補償仮説(compensation hypothesis)を支持すると考えた。

この仮説は、急な宗教的転向が厳しい情動的ストレスと危機の中で生じやすいこと(Ullman, 1982)、改宗者が報告した危機の多くが人間関係の破綻や離婚など愛着対象からの分離や喪失であったこと、母親との回避愛着者は青年期前期の突然の改宗体験が多かったこと

(Kirkpatrick & Shaver,1990) によって支持される。

Kirkpatrick(1999)は、先行研究の結果から、神との安定的な愛着を求め見いだそうとする典型的な人々は、ネガティブな自己モデルとポジティブな他者モデルをもつタイプ、4分類 (Bartholomew,& Horowitz,1991) のとらわれ型と3分類 (Hazan & Shaver,1987) のアンビバレント型であると考えている (補償モデル)。

宗教的な関与 (信心) はどのような心理的効果をもたらすのであろうか。多くの研究が、神を愛着対象とする信念をもつことが、種々の心理的健康とウェルビーイングとの関連を報告してきた。神との緊密な結合感と情動的ウェルビーイング (Galanter,1979)、神との私的関係の信念と孤独感の低減 (Kirkpatrick,Shillito,& Kellas,1998)、改宗と不安・抑うつ・情動的不快感の低減 (Ullman,1982)、宗教変数とストレスコーピングの関連 (Pargament,1990 など) などである。

Noller & Clarke(1995)によると、精神的健康に関係する宗教的信心や行動の唯一の測度は神への愛着測度であった。神への安定愛着は低い抑うつ傾向と結びついており、神への愛着が恐れ／とらわれの信者は、安定愛着あるいは無秩序信者あるいは無信心者と比べて、自尊心が低く高不安であった。

一方、日本においては、愛着と宗教意識・行動との関連を検討した報告はまだないようである (杉山, 2001)。平均的な日本人は様々な神や仏と関わり合いながら過ごすが、イスラム教やキリスト教などの一神教の信者が、自らの信仰する宗教の規範を厳格に守りながら生活している姿とは対照的である。NHK 放送文化研究所が2003年に行った調査では、16～29歳の若年層で神仏のどちらかを信じている人25%、神仏以外のもの (奇跡・お守り・占いなど) だけを信じている人41%、何も信じていない人26%、わからない・無回答8%であった。神や仏のような絶対的な存在は信じないが、奇跡や占いなどの不可思議なものに対しては強い関心を抱いている若者の志向を伺うことができ

る。さらに、高年層も含めた全体では、神も仏も両方信ずる人が21%に上り、どちらか一方を信じる人よりも多いことが指摘され、日本人の宗教意識の独自性を示すものと考えられた (NHK 放送文化研究所, 2004)。

金児 (1993;1997) は、2つの寺社に参拝する人々を対象とした宗教意識・態度の調査資料の因子分析を行った結果、以下の5つの因子を報告した。まず、一般的な意味で宗教に対して、好意的態度を示すのか否定的態度をとるのかという「向宗教性」、風俗や年中行事としての宗教との結びつきに親しみを感じ、自然にも敬虔な気持ちをもつ「加護観念」、霊的存在への信仰、死者への畏怖の感情、あるいは願い事をかなえたり祟りや罰を与えたりするような存在に対する畏怖の念や輪廻転生を信じる「靈魂観念」、氏神様や祖先を祭る行事などを尊重する「祖先崇拜」、科学と宗教の対立に関する見解で、实际的合理的な反応を表す「近代合理主義」である。

本研究の第1の目的は、こうした日本の宗教風土の中にKirkpatrick(1999)らの指摘する愛着との対応関係がみられるのかどうかを検討することである。さらに、宗教意識や行動は個人が困難な事態にある時活性化されると報告されている。

我々は、本研究で女子大学生を対象とするが、青年期における心理的不健康の表れである抑うつ症状はストレス状況において増強され、青年の心理的生活に甚大な影響をもたらすとされている。青年期における内的作業モデルは抑うつ傾向に影響するという知見が得られていること (鮎川,2005)、強い宗教的関与によってポジティブな心理的効果がもたらされることから (金児,1998)、本研究の第2の目的は、愛着の内的作業モデルが宗教意識とストレス対処を介して抑うつ傾向に影響するであろうという仮説を検討することである。

方 法

調査対象：T女子大学1、2年次学生92名、T女子短期大学2年次学生96名、計188名を対象として調査を行った。回答の不備がみられ

たものを除き、分析には157名の資料が用いられた。

質問紙の構成：①内的作業モデル尺度（詫摩・戸田,1988）18項目に6件法で回答を求めた。

②宗教意識項目（1993）を参考に作成）22項目に4件法で回答を求めた。③ストレスコーピング尺度（尾関,1993）現在最も強くストレスを感じていることの記入を求め、それに対する意識や行動に関する16項目に4件法で回答を求めた。④抑うつ尺度（CES-D、島・鹿野・北村・浅井(1985)）20項目に4件法で回答を求めた。

調査の実施：両大学において、授業中の一部を利用し、受講者に質問紙を配布して回答を求めた。①②は10月中旬、③④は12月中旬に行われ、両者の資料を対応づけるために学籍番号の記入を求めた。資料の機密に注意すること、

回答を回避できることを説明した。

結果

1. 各尺度の因子分析

各質問項目について主因子法（バリマックス回転）による因子分析を行った。宗教意識については以下の5因子が抽出された（表1）。信心すれば願い事はかなえられる・困ったときに神仏にたよるという「信仰への依存」（ $\alpha = .72$ ）、信仰によって安らぎの気持ちを持てる・人生の目的が持てるという「宗教的信心」（ $\alpha = .59$ ）、宗教的行事は無意味だ・宗教的しきたりには抵抗を感じるという「宗教への不信」（ $\alpha = .61$ ）、観音さまやお不動さまに親しみ・寺社に安らぎを感じるという「寺社への親和」（ $\alpha = .64$ ）、人は生まれ変わる・死後世界はあるという「死後

表1 宗教意識項目の因子分析結果

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
9. 神様や仏様を信心して願いごとをすれば、いつかそれはかなえられる	0.655	0.185	-0.091	0.072	0.108
21. 困ったときには神様や仏様にお祈りをする	0.648	0.184	-0.008	0.165	0.049
16. 自分を守ってくれる神や霊は存在すると思う	0.567	0.111	-0.296	0.147	0.343
20. 死者の供養をしないとあたりがあると思う	0.491	-0.048	0.029	0.079	0.270
11. 占いやおみくじを気にする	0.404	-0.033	-0.079	0.018	0.162
2. 信仰をもっていれば、困難な時でも安らぎの気持ちを持てる	0.020	0.830	-0.600	0.037	0.003
1. 宗教心のない人は、心のまずい人である	0.121	0.454	0.096	0.230	-0.031
8. 信仰を持つことによって、人生の目標が与えられる	0.043	0.425	-0.134	0.178	0.077
15. 針供養などの昔からの宗教的行事は、無意味な風俗で	0.033	-0.044	0.693	-0.194	-0.134
13. 宗教が人生の意味を明らかにしてくれることはない	0.017	-0.083	0.607	0.149	-0.095
22. 宗教的なしきたりや年中行事には抵抗を感じる	-0.185	-0.011	0.444	0.041	0.005
10. 観音さんやお不動さんに親しみを感じる	0.289	0.132	-0.058	0.664	0.118
12. 神社やお寺に行くこと安らぎを感じる	0.121	0.175	-0.101	0.614	0.172
3. 山・川・木など自然の霊が宿っているように感じることもある	0.016	0.159	-0.106	0.512	0.085
14. 人は死んでも、繰り返し生まれ変わるものだ	0.233	0.068	-0.087	0.160	0.645
6. 死後の世界はあると思う	0.218	-0.011	0.028	0.101	0.579
17. 地獄・極楽というのは迷信である	-0.203	-0.030	0.222	-0.062	-0.449
4. 先祖の供養は大切だと思う	0.326	0.122	-0.2	0.205	0.158
5. 宗教を信じていなくても幸福な生活を送ることができる	-0.098	-0.078	0.135	-0.071	0.115
7. 宗教を信じてても何のご利益もない	-0.199	-0.345	0.311	-0.002	-0.056
累積寄与率	19.3	26.3	32.1	36.3	39.8
α	0.72	0.59	0.61	0.64	0.64

表2 ストレス対処項目の因子分析結果

項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
6. 時の過ぎるのにまかせ	0.805	0.064	0.114	-0.014
4. なるようになれと思う	0.610	0.001	0.154	-0.016
2. 先のことをあまり考えないようにする	0.466	0.024	-0.044	-0.017
16. 気持ちを和らげるのに役立つことをする	0.217	0.615	0.221	0.162
1. 現在の状況を変えるようにする努力をする	-0.192	0.547	0.020	-0.064
9. 問題の原因を変えるように努力をする	-0.023	0.540	0.013	-0.050
3. 自分で自分を励ます	-0.043	0.489	0.258	0.170
15. 今の経験はためになると思うことにする	-0.049	0.281	0.684	0.011
8. たいした問題ではないと考える	0.355	-0.009	0.455	-0.012
5. 物事の明るい面を見ようとする	0.089	0.368	0.423	0.087
7. 人に問題解決に協力してくれるように頼む	0.053	0.043	-0.006	0.687
12. 自分のおかされた状況を人に聞いてもらう	-0.064	0.101	0.059	0.475
14. こんな事もあると思ってあきらめる	0.514	-0.115	0.441	0.120
11. 気持ちをまぎらわせるようなことをする	0.413	0.472	-0.025	0.260
10. 何らかの対応ができるようになるのを待つ	0.165	0.367	0.047	0.151
13. 情報を集める	-0.306	0.364	0.150	0.163
累積寄与率	17.3	28.9	33.9	38.1
α	0.66	0.63	0.56	0.47

の世界」($\alpha = .64$)である。

現在最もストレスと感じていることとして選択されたものは、人間関係(26.6%)、学業(22.4%)、進路(13.5%)、その他(27.3%)であった。ストレスコーピング尺度の因子分析の結果、回避・逃避因子($\alpha = .66$)、積極的対処因子($\alpha = .63$)、消極的対処因子($\alpha = .56$)、対人的対処因子($\alpha = .47$)の4因子が見いだされた(表2)。

内的作業モデル尺度の因子分析からは、安定愛着因子、回避因子、アンビバレント因子の3因子が確認された。以上の3尺度については各因子別に、抑うつ尺度については20項目の合計得点を求め、以下の分析を行った。

2. 愛着タイプ別の比較

宮本・佐藤・北本(2002)に基づき⁽¹⁾、内的作業モデルの分類を行ったところ、安定型(48名)、アンビバレント型(38名)、回避型(8名)、安定アンビバレント型(32名)、安定回避型(7名)、アンビバレント回避型(23名)という分布が得られた。人数の少ない2群を除き、愛着タイプ間を比較するため、宗教意識、ストレスコーピングの各因子合計得点と抑うつ得点について分散分析を行い、LSD法による多重比較を行った。

その結果、宗教意識については「宗教信心」に有意な傾向が認められ($F=2.234, df=5/152, p<.10$)、安定型がアンビバレント回避型よりも高い得点を示した(図1)。また、人数が少ないので有意ではなかったが信仰依存において回避型の得点が低いことが認められた。

さらにストレスコーピングについては、回避・

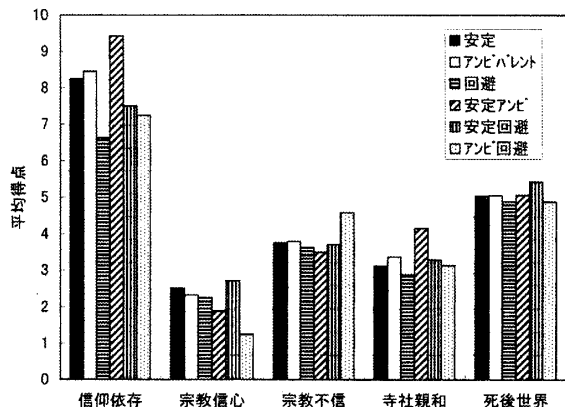


図1 IWM各タイプにおける宗教意識因子の平均得点

逃避因子が有意傾向であり($F=2.182, df=5/157, p<.10$)、安定型がアンビバレント回避型よりも低い傾向にあった(図2)。また有意ではないが、積極的対処でアンビバレント型と安定回避型で得点が低いことがわかる。

抑うつ尺度得点も有意であり($F=20.676, df=5/157, p<.001$)、安定型がアンビバレント型、安定アンビバレント型、アンビバレント回避型よりも低く、安定アンビバレント型がアンビバレント回避型よりも低いことが認められた(図3)。

3. 各因子間の相関係数

内的作業モデル3因子と宗教意識・ストレスコーピング各因子・抑うつ間のピアソン相関係数を算出した(表3、表4)。内的作業モデルと宗教意識においては、回避と信仰依存との間に低い負の相関($r = -.198$)、宗教不信との間に低い正の相関($r = .179$)が認められた。また、内的作業モデルとコーピングにおいては、安定と積極的対処の間に低い正の相関($r = .157$)、

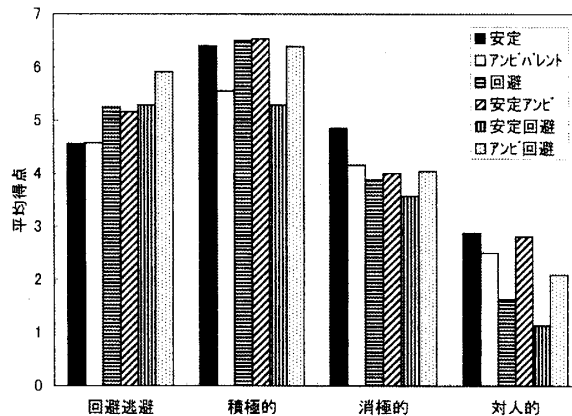


図2 IWM各タイプにおけるストレス対処因子の平均得点

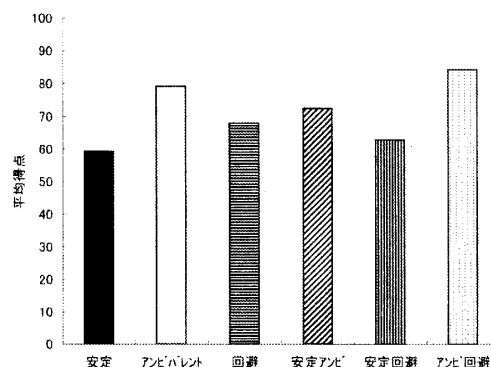


図3 IWM各タイプにおける抑うつ尺度の平均得点

対人的対処との間に低い正の相関 ($r=.176$) が認められた。また、回避と対人的対処の間に負の相関 ($r=-.248$) が見いだされた。

さらに、抑うつとアンビバレントに強い正の相関 ($r=.660$)、安定に中程度の負の相関 ($r=-.387$)、回避に低い正の相関 ($r=.281$) が認められた。また、抑うつとストレス対人的対処に低い負の相関 ($r=-.245$) が見いだされた。

表3 IWM・宗教意識・ストレス対処各因子・抑うつ間の相関係数 ($n=157$, 太字は $p<.05$)

		宗教意識				
IWM	信仰依存	宗教信心	宗教不信	寺社親和	死後世界	
安定	0.154	0.128	-0.082	0.083	-0.027	
回避	-0.198	-0.099	0.179	-0.072	-0.047	
アンビバレント	0.075	-0.095	0.027	0.068	0.083	
		ストレス対処				
IWM	回避逃避	積極的	消極的	対人的	抑うつ	
安定	-0.057	0.157	0.153	0.176	-0.387	
回避	0.085	0.011	-0.052	-0.248	0.281	
アンビバレント	0.156	0.097	-0.124	-0.075	0.66	

表4 宗教意識・ストレス対処各因子・抑うつ間の相関係数 ($n=157$, 太字は $p<.05$)

ストレス対処	信仰依存	宗教信心	宗教不信	寺社親和	死後世界	抑うつ
回避逃避	0.072	-0.055	0.153	0.048	0.023	0.17
積極的	-0.05	0.064	-0.005	0.124	-0.011	-0.007
消極的	0.006	0.144	-0.016	0.025	-0.091	-0.094
対人的	0.124	0.041	-0.078	0.104	0.085	-0.245
抑うつ	0.046	-0.082	0.021	0.001	0	

4. 内的作業モデル、ストレス対処、宗教意識、抑うつの重回帰分析

内的作業モデルが直接的に、またストレス対処と宗教意識を介して間接的に抑うつ傾向に影響するであろうという仮説を検証するために、以下のような重回帰分析を行った。まず第1に内的作業モデルを独立変数、ストレス対処、宗教意識、抑うつを従属変数として、第2にストレス対処を独立変数、抑うつを従属変数として、第3に宗教意識を独立変数、抑うつを従属変数として順次重回帰分析を行った。その結果をまとめたものが図4である。なお数字は標準偏回帰係数 (β)、() 内は決定係数である。

この図から、抑うつ傾向に直接的に最も大きな促進的影響を及ぼしたのは内的作業モデルのアンビバレントであることが認められる ($\beta=.593$)。安定と回避は抑うつに直接的な影響は

及ぼしていなかった。

さらに、内的作業モデルからストレス対処を介して抑うつに影響する経路は、回避が対人的ストレス対処に抑制的影響 ($\beta=-.216$) を及ぼし間接的に抑うつ傾向を低下させる効果 ($\beta=-.194$) を持っていた。一方、積極的ストレス対処は内的作業モデルの安定と回避から促進的影響 (安定: $\beta=.257$, 回避: $\beta=.183$) を受けていたが、抑うつ傾向との関連は認められなかった。

また、内的作業モデルから宗教意識を介して抑うつ傾向に至る経路は、アンビバレントが信仰への依存に促進的影響 ($\beta=.206$) を与え、回避は信仰への依存に抑制的 ($\beta=-.196$)、宗教への不信に促進的影響 ($\beta=.181$) を与えていたが、いずれも抑うつ傾向への影響は認められなかった。

考察

1. 内的作業モデルと宗教意識

女子大学生を対象とした本研究では、宗教意識の因子構造は金児 (1993;1997) の見いだした「向宗教性」、「加護観念」、「靈魂観念」、「祖先崇拜」、「近代合理主義」という5因子とは幾分異なったものとなった。本研究の「信仰への

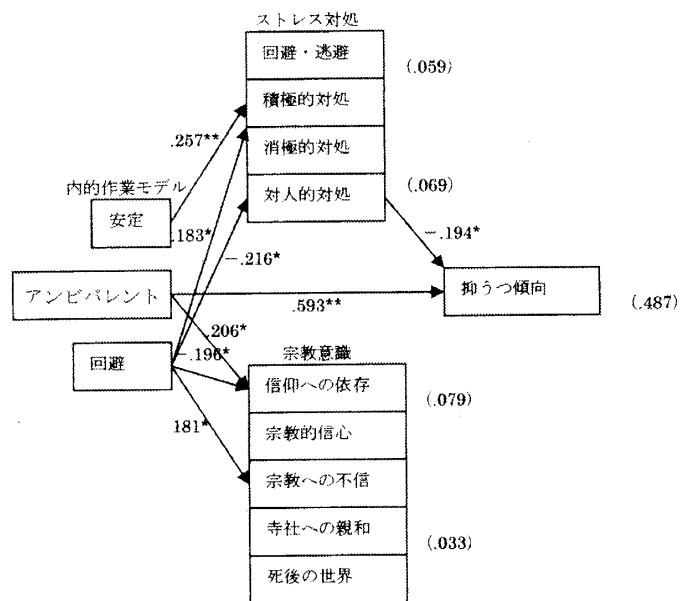


図4 内的作業モデルと宗教意識、ストレス対処、抑うつ傾向の関連図 () は決定係数

依存」「宗教的信心」は「加護観念」「向宗教性」とある程度対応しているが明確に分離されているわけではなかった。また「宗教への不信」は「近代合理主義」と、「寺社への親和」は「祖先崇拜」と、「死後の世界」は「靈魂観念」と対応すると考えられるがいずれも項目の混入が認められ、名称の変更が適切と考えた。これは、金児(1993;1997)が寺への参拝者という宗教的関与の高い集団を対象としたのに対して、我々は宗教信心が低い若年層を対象としたことによるとと思われる(NHK放送文化研究所, 2004)。

内的作業モデルと宗教意識との関連をタイプ間の比較と相関分析によって検討した結果、内的作業モデルの回避因子は信仰への依存が低く、宗教への不信が高い傾向が認められた。この結果は、安定型が回避型よりも高い宗教的関与を示し、回避型は自分を不可知論者であるとする傾向があるが、アンビバレント型は不明確であるという Kirkpatrick & Shaver(1992)の報告と一致しており、対応仮説を部分的に支持する結果といえる。

2. 内的作業モデルとストレスコーピング・抑うつ

内的作業モデルと抑うつについては、アンビバレントとに高い正の相関が認められアンビバレント型も高い抑うつを示し、安定愛着は逆の傾向を示した。これは鮎川(2005)の報告と一致しており、子どもの頃の親子関係を反映した内的作業モデルが青年期の精神的健康に影響することを示唆する。

さらに、ストレスコーピングについては、回避型が対人的対処をとらない傾向が認められるとともに、安定型が積極的対処と対人的対処の方略をとる傾向が見いだされた。この結果は、成人愛着理論(Hazan & Shaver, 1987)の内的作業モデルの定義と一致するものであり、対人関係以外の部分にも影響を及ぼしていることを示唆している。

3. 愛着とストレスコーピング・宗教意識及び抑うつの関連

内的作業モデルが直接的に、またストレス対

処と宗教意識を介して間接的に抑うつ傾向に影響するであろうというモデルに基づき重回帰分析を行った結果、まず、抑うつ傾向に最も大きな促進的影響を及ぼしていたのは内的作業モデルのアンビバレントであった。アンビバレント傾向の強い者は、人間関係の中ですがりつきなどの相手とのアンバランスな対人行動をとりやすく、見捨てられ不安のような不安定な感情を持ちやすいとされている。本研究の対象となった女子大学生が最もストレスと感じていたものは、人間関係一般や恋愛関係・家族関係であり、対人関係の問題をうまく解決できないことが抑うつ傾向をもたらしているとも考えられる。

内的作業モデルの宗教意識への影響については、アンビバレントが信仰への依存に促進的影響を与え、回避は信仰への依存に抑制的、宗教への不信に促進的影響を与えていたが、いずれも抑うつ傾向とは無関連であった。アンビバレント傾向を持つ者は安定した愛着関係を維持することに困難を感じ、別の愛着対象を模索する。その選択肢の中に宗教への関与も入っていると思われる。今回の調査はキリスト教の神の概念を明示しなかったが、中にはそのようにとらえた者もあったかもしれない。

回避は対人的ストレス対処に抑制的影響を及ぼし、間接的に抑うつ傾向に影響していた。さらに積極的対処にも促進的影響を及ぼし、安定も同様に積極的対処に促進的影響を示したが、抑うつ傾向との関連は認められなかった。

アンビバレントの宗教親和性との関連は愛着の補償仮説を支持すると考えられるが、宗教意識が抑うつ傾向に全く影響を及ぼさなかったことは、少なくとも女子大学生においては宗教への関与が精神的健康とは大きな関連を持たないことを示す。また、キリスト教圏と異なり、多くは仏教徒もしくは無神論者と思われる日本人の宗教行動は愛着行動とは対応関係にないといえよう。

4. 残された問題と今後の課題

今回の調査は、記名式であったため宗教属性の明示的な質問は避けざるを得なかった。若年集団においてもキリスト教徒や宗教行動を日常

的に行っている者も存在する。今後は、第1に、そうしたキリスト教徒や高齢世代を対象として内的作業モデルと宗教意識との関連を検討する必要があると思われる。

成人愛着の測定法として、近年、自己と他者のポジティブなモデルとネガティブなモデルの組み合わせによる愛着の4分類法 (Bartholomew & Horowitz, 1991) が用いられるようになってきた。この方法によると、自己と他者がポジティブな安定型、自己がポジティブで他者がネガティブな無視/回避型、自己がネガティブで他者がポジティブなとらわれ型 (アンビバレント型)、自己も他者もネガティブな恐怖/回避型に分類される。我々は、これまで Hazan & Shaver (1987) の3分類法を用いてきたが (宮本・佐藤・北本 (2003) など)、4分類法を用いた愛着と宗教意識・宗教行動の研究も必要であろう。

最後に、Kirkpatrick (1997) は、成人女性を対象として宗教信念・宗教行動と愛着の関連を追跡的に調査し、回避型とアンビバレント型が安定型よりも新たな宗教的体験や改宗経験が多いことを見いだした。ダイナミック・システムとしての愛着理論と宗教との関係は、発達的な観点に立ち、ライフイベントとの関連を導入することで新たな知見を得ることができると思われる。

註

- (1) 各因子得点 = 各因子尺度得点の合計 - (他の2因子尺度得点の合計 / 2) が正であることを基準に分類する。例えば、安定因子のみが正なら安定型、アンビバレント因子と回避因子が正ならアンビバレント回避型とする。

引用文献

- 鮎川奈緒子 (2005) 青年期の両親との愛着関係と抑うつ傾向 平成16年度東海女子大学修士論文
- Bartholomew, K. & Horowitz, L.M. (1991) Attachment styles in young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Bowlby, J. (1969/1982) *Attachment and Loss: Vol.1. Attachment*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1973) *Attachment and loss: Vol.2. Separation*. New York: Basic books.
- Feeney & Noller (1996) *Adult Attachment*. SAGE Pub. London
- Galanter, M. (1979) The "Moonies": A psychological study of conversion and membership in a contemporary religious sect. *American Journal of Psychiatry*, 136, 165-170. Cited by Kirkpatrick (1999)
- Gallup, G., Jr., & Jones, S. (1989) *One hundred questions and answers: Religion in America*. Princeton, NJ: Princeton Religious Research Center. Cited by Kirkpatrick (1999)
- Hazan, C., & Shaver, P. (1987) Romantic love conceptualization as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- Hood, R. W., Spilka, B., Hunsberger, B., & Gorsuch, R. (1996) *The Psychology of Religion: An Empirical Approach* (2nd Ed.). New York: Guilford Press.
- 金児暁嗣 (1993) 日本人の民族宗教性とその伝播 心理学評論, 26, 460-496.
- 金児暁嗣 (1997) 日本人の宗教性—オカゲとタタリの社会心理学— 新曜社.
- 金児暁嗣 (1998) 宗教と心理的充足感 濱口恵俊 (編) 世界の中の日本型システム (pp. 301-329.) 新曜社.
- 金児暁嗣 (2003) 日本における近代的価値観と宗教意識の変質 都市文化研究, 1, 23-35.
- Kirkpatrick, L.A. (1997) A longitudinal study of changes in religious belief and behavior as a function of individual differences in adult attachment style. *Journal for the Scientific Study of Religion*, 36, 207-217.
- Kirkpatrick, L.A. (1998) God as a substitute attachment figure: A longitudinal study of adult attachment style and religious change in college students. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24, 961-973.
- Kirkpatrick, L.A. (1999) Attachment and religious representations

- and behavior. In Hazan,C., & Shaver,P.(Eds.) *Handbook of Attachment*. Guilford Press.
- Kirkpatrick,L.A., & Shaver,P.R.(1990) Attachment theory and religion: Childhood attachments, religious beliefs, and conversion. *Journal of Scientific Study of Religion*, 29, 315-334.
- Kirkpatrick,L.A., & Shaver,P.R.(1992) An attachment-theoretical approach to romantic love and religious beliefs. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 18, 266-275.
- Kirkpatrick,L.A.,& Hazan,C.(1994) Attachment styles and close relationships: A four-year prospective study. *Personal Relationships*, 1, 123-142.
- 宮本邦雄・佐藤かおり・北本桜香 (2002) 女子大学生の内的作業モデルと家族表象—家族描画と円環母子関係イメージ画を指標として— *東海女子大学紀要*, 21, 67-77.
- 日本放送文化研究所 (2004) 日本人の意識構造第六版 日本放送出版協会
- Noller,P., & Clarke,S.(1995) *Attachment to God: Links of religion to attachment theory and mental health*. Paper presented at the National Council of Family Relations Conference, Portland,OR. Cited by Feeney,J. & Noller,P.(1996)
- Pargament,K.I.(1990) God help me: Toward a theoretical framework of coping for the psychology of religion. *Research in the Social Science Study of Religion*, 2, 195-224. Cited by Kirkpatrick(1999)
- 杉山幸子 (2001) 日本における宗教心理学の歴史と現状. *心理学評論*, 44, 307-327.
- Ullman,C.(1982) Change of mind, change of heart: Some cognitive and emotional antecedents of religious conversion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 183-192.
- Wright,S.A.(1987) *Leaving Cults: The Dynamics of Defecation*. Washington, DC: Society of the Scientific Study of Religion.